

生麦中だより

令和2年(2020) 4月 1号

「成熟した職場には笑顔がある。」

<http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/namamugi/>

「支えあう力」～新年度の始まりにあたり～

校長 山口 毅

252名の一年生を迎え、横浜市立生麦中学校の令和2年度が始まりました。全校生徒743名で、今までの輝かしい歴史と伝統に加え、新しい校風作りに、一人ひとりが主役となって、充実した中学校生活を送ってくれることを願っています。

入学式での「新入生誓いのことば」には、以下の一節がありました。

昨年度二月よりこれまで、新型コロナウイルスによる感染症が世界中で大流行しています。そのため私たちは、学校が休校となり、仲間にも会えず、小学校生活がこのまま終わってしまうのではないかと寂しく、悲しい思いをした日もありました。しかし、先生方のおかげで、無事卒業式を向かえることができ、こうしてこの場に立つことが出来ていることに、感謝でいっぱいです。

今日、私たちは、これまでの学びや経験を胸に生麦中学校に入学します。

今までとは、違う新しい生活に不安や緊張もあります。しかし、新しい生活との出会いに、部活動といった期待や希望への思いを心に持ち、『一人はみんなのために、みんなは一人のために』思いやりの心を大切にして生活していきたいと思います。仲間と共に励まし合いながら実りある、充実した中学校生活を歩んでいきたいです。

なんと素敵で一節でしょう・・・卒業式も入学式も厳しい環境で挙行されたにもかかわらず、小学校の先生方への感謝を忘れず、入学する生麦中学校への希望を述べています。

新入生の代表の思いをしっかりと受け止め、子どもたちの成長のために、真摯に教職員一同取り組んで参ります。今年度も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆さんとの笑顔の再会に向け、職員一同、準備をしています。

感染症拡大の終息を願いながら、

学校で、皆さんを待っています。

生麦中学校 職員一同

学校教育目標

「コミュニケーション能力を身に付け、主体的に学習する生徒を育てます。」

- 思いやりの気持ちを大切にし、心の豊かさを育みます。
- 向上心を持ち、麦のようにたくましく生きる力を高めます。
- 想像力を豊かにし、社会に貢献する姿勢を養います。



入学式 新入生誓いのことば

学校経営中期取組目標

- 「笑顔溢れる成熟した学校づくり」を目指します。
 - ・カルキュラムマネジメントを通して、学校の教育力を向上させます。
 - ・授業改善の視点を充実するとともに、生徒が主体的に取り組む授業の実践を目指します。
 - ・挨拶を大切にし、強い意志を持って、しなやかに思考し、正しい行動を行う力を育てます。
 - ・体力向上一校一実践を推進し、学校生活の中で体力向上に取り組みます。
 - ・地域活動に積極的に参加し、「まち」とのつながりを強めていきます。
 - ・生徒の将来の自立を目指し、社会で生きてはたらく資質・能力(自立のための基礎力)を高めます。

裏面あり→

日本教育新聞 令和2年4月6日発行

本校、桑山副校長先生の記事が「日本教育新聞」に掲載されました。

桑山副校長先生は、常に生徒・保護者の視点に立ち、教職員に寄り添いながら的確なアドバイスをしながら、学校経営の柱となって本校を支えてくれています。

経験豊富な副校長先生の奮闘記の掲載です。

副校長・教頭

奮闘記

317

桑山 博 横浜市立生麦中学校副校長



臨時休業中に考える

2月27日の夕方、職員室に衝撃が走った。別室で電話対応を終えて職員室に戻ったところ、副校長先生大変です。安倍首相が……。慌ててテレビを見ると3月2日から全国の小・中・高、特別支援学校に休校の要請をしたという臨時ニュースだった。直前に発表された基本方針の中に「臨時休校」という発言はなく安堵した矢先だったので、本当に驚き困惑した。木曜日の夜の臨時ニュースであり、翌週の月曜日からの休校とは……。この衝撃は全国の学校および教育関係機関、子どもを持つ各家庭に走ったに違いない。

子どもがいなくて張り合いなく、心痛む

臨時休業期間中はもちろん生徒は誰も登校しない。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、教職員に時差出勤や年休等を推奨したが、ほとんどの教員は通常の出勤し、朝から黙々とパソコンに向かっている。ちょうど年度末の成績処理や連絡票作成の時期でもあるので

でやむを得ないのである。生徒も誰もいない静かな学校、事務仕事は確かにほかどるが何か違和感がある。この違和感、私の過去の記憶から痛みを伴った2回の経験を思い出させた。一つは、2009(平成21)年の新型インフルエンザの世界的流行(パンデミック)の時、もう一つが2011(同22)年の東日本大震災の時だ。その時の私は教務主任であり、部活動顧問も務め、本当に多忙な毎日を送っていた。生徒の活動のない時間ができ、事務仕事がはかどったが、気持ちの張り合いや充実感がなく、それが心の痛みとなっていった。退勤時刻の午後5時になると教員は次々に帰る。予定した仕事が順調に進んだのである。日は明るく、明るいうちに帰れる。なぜか笑顔がない。普段なら生徒下校後の午後6時過ぎから事務仕事にかかる。特に年度末は夜遅く、多数の教員が午後9時ごろまで残る。食事をする所やコンビニも近くにないため疲労と空腹に耐えながら仕事をしているはずであるが、職員室にはなぜか活気があった。午前8時半に出勤し、予定の仕事を終えて午後5時に帰れる。現在の臨時休業中の勤務は、働き方改革の視点から見れば満点であるが、教員は働いた充実感を持って家路についているだろうか。今、副校長として職員室での教員の様子を見てみると、「あのときの自分の気持ちと同じではないか」と感じる。私たちは児童・生徒と関わる教育活動を仕事に選んだのであり、定時の出勤・退勤を求めているのではない。今回の臨時休業で「私たちの仕事とは何か、私たちにとっての働き方改革とは何か」を深く考えさせられた。

～歴史に学ぶ～

始業式が終わった夕刻、地域の方が本校から富士山の写真を撮っておられました。お声をかけたところ、生麦中学校の歴史にふれるお話を聞くことが出来ました。次の日、1年学年便りに、お聞きしたことに加え、その由来が詳しくありましたので、再度ご紹介します。

『生麦の由来』(1年学年 だより 風の若葉 から)

生麦中学校があるこのあたりを昔は貴志(きし)村と言ったそうです。江戸幕府の2代将軍秀忠(ひでただ)がこの地を通ることがあったのですが、道がぬかるんでいて通れませんでした。すると村人が街道脇の生麦を刈って道に置いて通れるようにしました。秀忠は村人への感謝のしるしとして、この一帯に『生麦』という地名を与えたとされています。しかし、この地の名産のミル貝など、貝をむき身にして生計をたてていた家が多かったので「生むき村」と呼ばれていたとする説や岸谷にある龍泉寺から見つかった「生麦の碑」に由来する説など、実際はいろいろな説があるようです。そしてこの生麦に400年以上前から伝わるお祭りとして『じゃもかも祭り』があるのをみんなも知っているでしょう。「じゃもかも」を漢字で書くと『蛇も蚊も』になります。疫病(流行りの病)を追い払い、海上の安全、そして子どものすこやかな成長を祈るためのお祭りで、カヤ(草)で大蛇を作り「蛇も蚊も出たけ、日よりの雨け…」と叫びながら、町中を回ったそうです。大蛇を担ぐと体が強くなるそうで、子どもたちは鶴見川の河口まで大蛇を流しに行きました。毎年6月6日に行われていて(今は6月の第1日曜日)、この祭りを過ぎると子どもたちは海に入るのを許されたそうです。

さて、その『大蛇』は生麦にある原の神明社で作られます。長さ約27メートル、胴回り1メートルほどの大きさで、目は貝殻(赤で縁取り、黒い目をしている)、舌はショウブ(草)、角(つのは木の枝(赤い色に塗られている)、尾には60センチくらいの木剣(赤と黒で塗られている)が取り付けられています。実はこの大蛇はお祭りが終わると、地域の方が生麦中学校まで運んでくれます。だから今は中学校の職員玄関に鎮座しているので、学校が再開したら行われる“校舎内めぐり”でぜひ見てください。きっとこの大蛇は生麦の地を今の流行り病から守ってくれていて、疫病を追い払ってくれると思います。

